HONTAN

図書館ボランティア「本探」が旬の図書館情報をお知らせします

2012年6月号 第29号

フムフムな情報がいっぱい！

HONTAN 12PIECES

今回の12ピースのテーマは、「明るく、元気になる本」です。ついダレがちな6月も、読書で乗り切ることが出来る！……はず。

空のおすすめ
福田栄一 913.6/F

『夏色ジャンクション』

700万円を持ったお爺ちゃんとそのお金を狙う住所不定無職の男の旅。

田のおすすめ
辻村深月 913.6/T

『本日は大安なり』

同日に同じ結婚式場で式を挙げる4組のカップル。大安吉日、それぞれの式の結末は……。

きょうのおすすめ
伊吹有喜 913.6/I

『四十九日のレシピ』

妻を亡くした夫、その娘、金髪ギャルで迎え四十九日。家族って難しいけど"あたたかい。

伊乃上のおすすめ
奥田英朗 913.6/O

『サウスバウンド』

元過激派で、子に「学校に行くな」と言い、税金を払わない破天荒な父とその家族の話。

カノンのおすすめ
アレックス・ロビラ 963/R
フェルナンド・トリアス・デ・ベス 著
田内志文 訳

『ゲッドラック』

マックスはすべてを失い変わり果てた友に祖父から聞かされた魅惑の森の物語を語り始める。

七味のおすすめ
森見登美彦 913.6/M

『夜は短し歩けよ乙女』

天然な彼女に振り向いてもらおうと頑張る私と奇々怪々な人たちの物語

きのこのおすすめ
宮部みゆき 913.6/M

『ステップファザー・ステップ』

中学生の双子と父親代わりにされた泥棒の、奇妙で暖かな物語。

花蓮のおすすめ
西加奈子 913.6/N

『漁港の肉子ちゃん』

底抜けに明るく素直で破天荒な母親と、その周囲の人々の物語。

きょうのおすすめ
野中ともそ 913.6/N

『鴨とぶ空の、プレスリー』

超ダメダメ親父とその息子、そしてロックの帝王が織りなす珍道中。

のずみのおすすめ
荻原浩 913.6/O

『あの日にドライブ』

うだつの上がらない父の葛藤を描いた作品。きっと今の人生も捨てたもんじゃない。

スーモのおすすめ
三浦しをん 913.6/M

『まほろ駅前多田便利軒』

お困りの節はお電話ください。悲しさ半分、ユーモア半分。そしてなぜかほっこりする話。

なのかのおすすめ
日野俊太郎 913.6/H

『吉田キグルマレナイト☆』

スーツアクターから着ぐるみの中の人転身！終始前向きな勢いの小説。

コラム 本探力

あきの「広島東洋カープ」

突然ですが広島東洋カープの"カープ"がどこからきているか皆さんご存じですか。カープとは英語で鯉のことですが、これは毛利輝元が築城した広島城の別名「鯉城」からきています。カープは12球団の中でもあまり目立った存在ではないです。しかし最近はマエケンこと前田健太選手の活躍でニュースになることも多いので、野球に興味のある人もない人もカープに注目してみてはいかがですか。

今月のDVD

自分の妻が襲われてしまい、助けようとして重にケがをしてしまい、新しいことを記憶することができなくなった男が犯人を捜す物語です。

物語は時系列に並んでいないため混乱してしまいます。しかし、それが良い効果を発揮しています。人間の記憶の曖昧さ、そして、脆さを実感させられるミステリーです。

⇨『MEMENTO』778.72/M 〈傘〉

HONTAN展示でみつけて

DVD展示

今回のDVD展示は『原作のあるDVD特集』です。原作小説と映像化された作品には、終わり方が違うものもあるんで、どちらも必見です！ 〈カノン〉

学生展示

今回の学生展示は『ブックセラピー 元気・癒しの本特集』と題しまして、心にくる本たちを集

おしゃべり

朱：今回のおしゃべりのテーマは
「好きな作家・作品について語ろう！」
です。
今まで読んだ中で一番好きな作家さん及び作品について、熱く語ってください。

なのか：ずっと言い続けているけれど、
大島真寿美／「やがて目覚めない朝が来る」（913.6/O）これが好き！
大島さんの本はこの1冊しか読んだことがありませんが、私が読んだ本の中で一番好きと言っても過言ではないくらい好きな本です。
ひとりの女の子の物語ですが、基本的に女の子のおばあちゃんやおばあちゃんの知人についてのあれこれを女の子目線で書いている本です。
私の思うこの本の魅力は、おばあちゃんを含め、女の子の周りにいる大人が素敵だというところです。
特に素敵なのは、女の子のウェディングドレスを作ってくれたミラさん！女の子の夢の舞台を、もっと素敵に演出してくれた方！
そんな素敵な人は女の子よりもずっと年上なので、次々といなくなってしまいます。でも、いなくなる悲しさより一緒に過ごした時間の素晴らしさがじんわり伝わるお話です。

花蓮：すごく有名なんだけど、伊坂幸太郎さんの「重力ピエロ」（913.6/I）
家族ってなんなのか、つながりってなんなのか、本当の絆とは何か。
中学高校時代から、ずっと、何度も読み返してぼろぼろになるまで読んだのはこの本が初めてです。
作品全体の雰囲気も、あちらこちらに散りばめられている伏線も、印象的な言葉も好きだけど、とにかくここで描かれている家族の関係性が素敵で。
こんなお父さんがいたらな、と思います（笑）

空：私は辻村深月さんの「凍りのくじら」（913.6/T）で。
居場所のなかった女子高生が自分の居場所を見つけるリル不思議な話なんですがさすが辻村さん。いろんなところに伏線があり読み終わった後すぐに2回目が読みたくなりました。

田：三浦綾子さんの「泥流地帯」（913.6/M-4）
北海道出身の作家さんで、登場する場所も北海道が多いです。泥流地帯も、上富良野の市街をさらに奥に行った部落が舞台。
大正時代の十勝岳大噴火で、家も学校も恋も夢も泥流で一気に押し流されて……。
真面目に生きていた主人公たちにも容赦なく襲いかかる泥流に無常さを感じながらも懸命に生きていく姿から、人生について考えさせられる本です。
読むたびにいろんなことを教えられて、人生観にも影響を与える本かも。

とおか：私は島本理生さんの「リトル・ベイ・リトル」（913.6/S）。
家族の話であり、恋愛の話であり、女の話であり、人そのものの話でもあると思っています。
だけど物語は何事もないように淡々と進んでいく。きっとこの先もそんな風に穏やかに続いていくんだろうなっていう結末を感じられる話です。

きょう：和田竜さんの「のぼうの城」（913.6/W）
ある小さい城の、「でくのぼう」とあだ名がつくほどのダメダメ城主が、あの石田三成に喧嘩を吹っかけちゃうお話です。
天賦の才を持つ家臣。どんどん変わる戦況。意表切りに寝返りなんでもあります。まるで小説フィクションのようにテンポ良く話が進みます。でも本当にあったことなんです。この本ほどワクワクしながらページをめくった本もありません。
歴史小説ということで、言葉遣いとか書き方とかも慣れ親しんだものではない人ですが、それがまた、その時の情景がはっきりと目に浮かぶようです。

のぞみ：荻原浩さんの「噂」（人荷待ち）
物語は、ある企業が「とある殺人鬼が女の子の足首を切りに来る。しかし、ミリエルという香水を使うと狙われない」という口コミを利用し、噂を広げ、この香水は大ヒットします。
しかし、実際に足首のない少女の死体が発見されてしまいます。さて、この事件の真相はいかに……？
この作品のウリは最後の一行です。
また、作中で事件が何度も発生しますが、ちょっとしたカラクリも存在し、読み返した時にそれに気付くと楽しませられます。

今月の1冊

米澤穂信「犬はどこだ」

913.6/Y

紺屋長一郎は探偵を始めた。探偵といっても何でもやる探偵ではない。犬を探すことを専門とした私立探偵だ。――なのに、最初に舞い込んできた仕事は失踪人探しと古文書の解読!? トレンチコートを着ているようなよくある探偵像に憧れて助手を志望する後輩と分担し、しかたなく仕事に取り掛かったものの……と、簡単に言えばこういう話。しかし2つの事件は巧妙にリンクし、紺屋は最後に苦い決断をします。
これは、とてつもなくドラマティックで、どことなくコミカルで、でも、どこまでも現実的な物語です。物語の中に潜む「現実」はきっと、なかなか消えない読後の余韻を残すでしょう。 〈とおか〉

Pick UP MAGAZINES

HONTAN 雑誌の書評を紹介

ダ・ヴィンチ 6月号 P176～P179

批評家の宇野常寛さんの連載「THE SHOW MUST GO ON」では、ドラマや映画の批評を行っています。今月号はNHKの『カーネーション』というドラマについてでした。この連載での批評は、そのドラマの設定されている時代の背景や、現在起きている事象と関連させて書かれています。ドラマと現在の事象との関連性の説明は私たちを納得させる内容になっています。別な角度から見ることが面白くなる文章です。 〈傘〉

宏太通信

館長さん情報

今年度の図書館長は社会福祉学部学部長の横山穣先生です。福祉臨床学科の先生で、北星は16

6月です。6月といえば雨の多い季節。雨垂れの音を聞きながらの読書もなかなかいいものです。「（